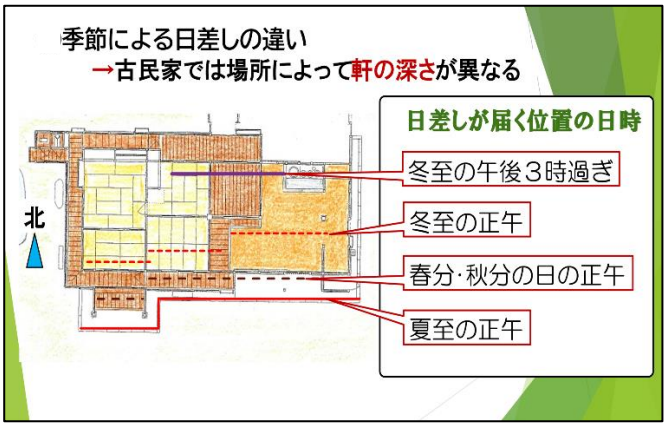
古民家だより

No. 41
令和４年（2022年）３月２９日（火）
越谷市教育委員会　生涯学習課

古民家や史跡、古文書などを見ていると、大きな自然災害や疫病、社会変動などに際して、先人たちはどのように受け止め生きていったのだろうと思うことがあります。開花した桜を眺めながら、古の人々もその折々に様々な想いで花を見たのだろうと思ったりします。

古民家は生きている

大間野町旧中村家住宅が昨秋に**国登録有形文化財**となったことの記念事業として、１３日に講座・見学会が行われました。その内容の一部と様子をご紹介します。（それぞれの建物の特徴については「古民家だより」Ｎｏ．３８をご参照下さい。）

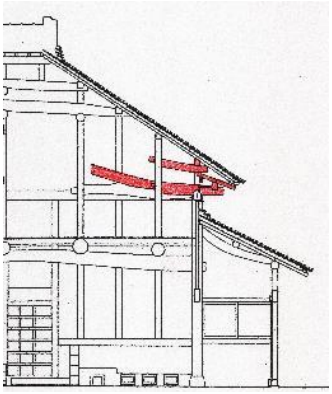


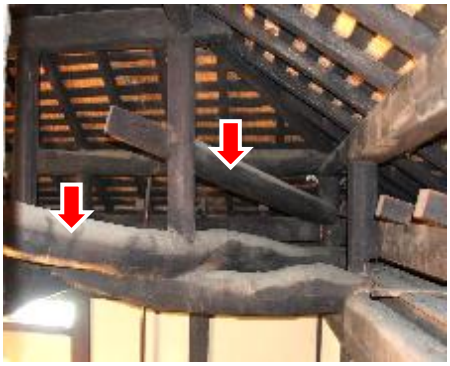
A：軒（のき）

現代住宅と違って古民家の軒は建物内での設置場所や、そこが向いている方位によって深さが異なります。東側の軒は浅く、南側は深いです。

右の図は季節や時刻による日差しの違いを示しています。土間は普段の出入口であるだけでなく、台所や作業場としての役割もあることから、冬の寒い日には日差しが奥まで届くように計算されているのでしょう。

わが国では古来､家の建て方は夏を基準とするのがよいとされてきました｡それは夏は高温になるだけでなく、湿気が多い（雨が多い）からです。この点は大陸内部と大きく異なりますので、軒が深い建物となります。すると壁から突き出した軒の荷重を支える工夫が必要になります。そのための構造が次の図と写真です。





これらの構造部材は垂木（たるき）（地垂木（じたるき）、飛檐垂木（ひえん）、化粧（けしょう）垂木等）や隅木（すみき）（化粧隅木（けしょうすみき））、桔木（はねき）、腕木（うでぎ）などと呼ばれるもので、多くはマツを使っています。

B：匠の眼力と技

建物の構造物が鉄筋の場合、それは何本でも均一的な質の部材を生産できます。しかし古民家は様々な種類の木材を組み合わせなければなりませんでした｡それらの部材は２つと同じ物はありません｡そして何世代もの間、150 年以上も使えるものでなければなりませんでした。そのためには次のことが肝要でした。

◆適材適所･･･どの種類の木材を、建物のどの部分に用いるかを見極める眼力。

千年以上もその地に立っている法隆寺や唐招提寺を建てた匠は、すでにその眼力を持っていました。（西岡常一『木に学べ』（小学館文庫）、小川三夫『木のいのち』（文春文庫）他）

◆加工技術･･･部材同士を結合させる規矩術と道具を使う技術。

太くて大きな部材を結合するには釘に頼ることはできません。規矩術（きく）（指矩（さしがね）を使って木材に

工作用の墨付けをする技術）とそれを実現できる道具の使い方を習得した匠の技です。

規矩術を生かした継ぎ手の例 ⟹

四方かま継手

控柱の継手
（大坂城大手門の柱に応用）

昔の遺物ではない

前述のAやBを考察すると、次のようなことがわかります。

ア:自然をよく観察して建てていること。

わが国の様々な季節と豊かな植物を生かしています。自然への畏敬が感じられます。また、屋敷林の落ち葉や枯れ枝は焚き付けに使い、その灰は肥料にしました。かつては物資が豊かでなかったこともありますが、自然の恵みを様々な形で享受し、またそのことに感謝して生活していました。

イ:いくつもの時代とその社会状況を映していること。

近世には村の名主としての役割を果たしていたので、そのための施設や格式が見られます。例えば奥座敷の書院造や式台付玄関の設え、棟の造作（青海波（せいかいは）や鏝絵（こてえ））です。また前庭は作業場でもあり村人への法令伝達など行政の場でもありました。

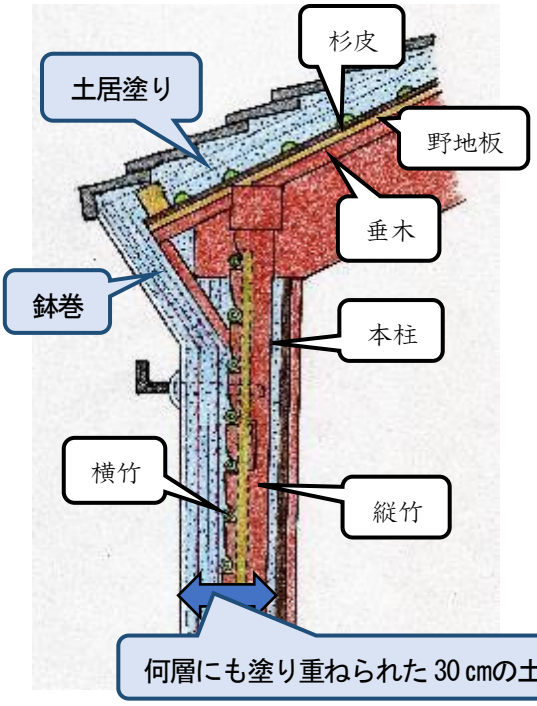
こうしてみると、古民家は単に過去の遺物ではなく、現代の私たちの生き方や将来の社会の在り方を教えているのかもしれません。

「温故知新」

今回聴講された方々の感想をご紹介します。

★イタリアの古代建築に似た箇所もあり非常に感動しました。　★「温故知新」について考えさせられました。
★普段の日常生活と違う時間を感じました。　★武家屋敷と民家の差異、プライバシーと民家の事を知りたい。
★文化は教訓と伝承と思います。それは現在と未来の大きな財産です。古民家もその一部で未来に伝えるべき大切なものです。　★人の在り様、考え方を考えさせられました。　★いつまでも残して欲しい。
★長屋門の外から見る景色がすばらしかった。（小学生）　★ここには小さな神社があったけど、さいたま市にある古民家にはなかったので、古民家によっていろいろ違うんだなと思いました。（小学生）

「建てられた時代、この様な立派な木々を人の力のみで作られた事を考えると、どれ程の人達が力を合わせ建てられたのでしょうか。息を合わせ、合気で持ち上げ組み合わせ、協力･協調性がなければ出来ない大作!!」という感想もありました。生前“法隆寺の鬼”と呼ばれた宮大工の西岡常一氏は次のように述べています。



世界で一番古い木造建築だからって見にくるんじゃ、意味がありませんで。飛鳥時代の人たちが、建築物にどう取り組んだか、人間の魂と自然を見事に合作させたものが法隆寺やということを知って見に来てもらいたいんや。（西岡常一『木に学べ』（小学館））

拙い講演ではありましたが、来館された方々がそれぞれに『古民家は生きている』ことを感じてくださいました。とても有難いことです。改めて感謝申し上げます。

事後のアンケートにいくつかのご質問がありました。その内、土蔵の耐火構造についてのご質問に模式図でお応えします。左図の水色の吹き出しの部分がそれです。

この度の事業内容に関する知識や情報には川崎市立日本民家園の渋谷卓男様、外山様から多くのご教示を頂きました。御礼申し上げます。